

氏名	ヒロ タ 廣田 まりも
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第276号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉母性と観音
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（美術学部） 布施 英 利
（副査）	“ “ 教授（ “ ） 松 尾 大
（ “ ）	“ “ “（ “ ） 梅 原 幸 雄
（ “ ）	“ “ “（ “ ） 佐 藤 道 信

（論文内容の要旨）

美術を制作するものにとって、本能や衝動といった表現の原動力となる心の動きは、常に意識すべき課題である。本研究の目的は、人間が無意識または下意識にもつ、本能たる「母性」が表現されていると考えられる美術作品について、形態から論究することにある。母性とは、「女性が母として持っている性質」、また、「母たるもの」とされるが、これらはどのような形象をもって表現されるのであろうか。

本論第一章では、明治時代に制作され、狩野芳崖の絶筆となった「悲母観音」（東京藝術大学大学美術館蔵、重要文化財）を採り上げる。「悲母観音」という画題は芳崖自身によるものではなく、また観世音菩薩は本来両性具有であるが、芳崖の表現した観音像を「母」とするならばその所以を、形態的な面から明らかにしたいと考えた。「悲母観音」に纏わる下図類の中に「観音／下図」があり、懐妊しているように見える天女が描かれることから、妊娠した女性との形態的共通点を探った。

装飾的な胸飾や条帛、天衣と裳を纏った観音像から身体の輪郭線を抽出するため「悲母観音 下図」の模写を試みると、その共通項は腰部に顕著に現われており、左前腕に架かった天衣の隙間に見える向こう側にはしっかりとした身体の輪郭がある。本画では更に、腰部輪郭の奥に垂髪が確認できる。この隙間は、前作フリーア美術館蔵「観音」には無かった空間と身体の輪郭であり、女性的な腰部の括れを形づくっている。胸飾の角度や、腹部の張りについても、前作「観音」との形態差は明快であるが、この形態的特徴の変化は単に女性化というだけではなく、妊娠した女性への変化であるようにみえる。

第二章では、女性人体の生体観察と計測、内部構造と外形およびその関係から妊娠した女性の形態的特徴を具体的に導き出したいと考えた。そこで、主に妊娠している女性の形態を観察し、デッサンと写真撮影、計測による形態的特徴の考察をした。個人差の大きい数値や取材困難であった妊娠発覚から臨月までの、マルチン式計測による時系列データについてはワコール人間科学研究所のご協力のもとに取材した。

一ヵ月毎の写真データのトレースを試みると、妊娠による女性の形態変化は主に腹部の肥大に著しい。また、腹部の膨隆に伴って重心線は後方へ移動し、胸部以上の半身はやや反りかえる。そしてその体型は「弓形」の全体感を持つという特徴を結果として得られた。母性を感じることのできる、女性的な丸みをもった優しい表情の彫刻の観音像においても、この「弓形」の全体感をもち、臨月の妊婦のような腹部の膨隆が同時に表出する作品は多くない。「悲母観音」観音像の姿はまさに臨月を迎えた妊婦と共通する、ゆるやかな「弓形」の全体感をもつプロポーションを描いているのである。故に「悲母観音」観音像が妊娠した女性の形態をなす蓋然性は高くなるといえる。

第三章においては、原始美術における地母神像、聖母子像、土偶、観音菩薩像など、「母性」を感じる

ことのできる美術作品のもつ形態とその印象について、妊娠した女性の形態との比較を行った。また、「悲母観音」の母子像としての性質について考察した。嬰兒の奥に描かれた蓮の葉の表現を胎盤と捉えたとき、円相＝子宮という写実性が現れ、命を支える水である羊水や、仄かな朱に彩られた臍帯に生命感が表現されている。この意味において、「悲母観音」は仏画とも聖母子像とも共通点があるが、またそのどれとも違った写実性を持つともいえる。観音図や観音菩薩像に表現された形態には、それに纏わる説話からも読み取れるように、仏教の伝播と共に、様々な女性的イメージ・母性的イメージが幾重にも重なって包含されてきており、「母性」が本来具えている特徴（包含する・呑みこむ機能）のとおり、その形態においても包含されてきたのであろうと考える。

第四章では結論として、「母性」が表出した美術とその関係性についての属性を、形態的な側面から纏めた。歴史上の美術から「母性」の表象を抜き離れた場合、そこには常に願いや祈りからくる信仰心が宿っている。原始美術においてより、多産への呪術的役割を担っていたと考えられる美術作品は女性裸像として多く出土しているが、日本古代の土偶にも表出されているというこの「太母」的美術表現を「原始的母性」とした場合、愛着や理想の母を表現した母子像などの母性の美術は「社会的母性」の属性を持つと考えられる。

妊娠した女性の身体的特徴が「母たるもの」の根源的形象であるとするならば、その形態は「母性」を表現した美術作品に信仰心を与えてしまうほどの神々しさを包含した形態である。美術作品に原始的、あるいは社会的「母性」の性質を見出したとき、「悲母観音」はそのどちらの形態的特性をも兼ね備えている。そしてそれは常に、生体観察に基づいた形態であるからこそ、私達は本能的に共感し、感銘を受けるのではないだろうか。

#### (博士論文審査結果の要旨)

本論文の筆者・廣田まりもさんは、学部では絵画科・日本画を専攻した。大学院修士課程からは美術解剖学を専攻しているが、そのような経緯から日本の絵画における身体表現が、筆者の一貫した研究テーマである。

本研究は、狩野芳崖の「悲母観音像」が、妊婦の形態である、ということをも美術解剖学の手法により実証したものである。芳崖の「悲母観音像」は東京芸術大学・大学美術館の所蔵であり、本研究のために大学美術館の協力により詳細な調査を行うことができた。調査に立ち会った指導教官の布施（本論文主査）も、明るい照明のもとに輝く色彩と線に、この絵画がまぎれもない一級品であることを実感することができた。

本論文の最大のポイントは、「悲母観音像」の体形から、それを妊婦と解釈した新知見の提示にある。当時から現在にいたる数多くの言説や先行研究でも、観音像と童子（嬰兒）を母子像に議したものと解釈した指摘は枚挙にいとまがないが、観音の腹部のふくらみに着目し、それが太った体形ではなく、妊婦に他ならないことを実証した。この研究の着眼点は、美術解剖学ならではの視点として斬新であり、そこには筆者の女性としての視点も生かされていると感じられる。また日本画出身という筆者の経歴を生かし、観音像から衣服を取り払った体形線の描写も提示した。これも見事であった。妊婦の体形の基礎データとしては、ワコール人間科学研究所にあるが、同研究所の協力で筆者が主集した妊婦の体形変化とも、その裸体の観音像の体形は符合し、説得力のある画像資料となっている。

本論文の構成は、第一章で狩野芳崖の「悲母観音像」の形態を分析し、先行研究を参照しつつ、筆者オリジナルの論を展開していく。

第二章『母』の形態』では、妊婦の生態観察や形態計測を行い、そのデータを分析し、妊婦の体の特徴を明らかにしていく。

第三章では「原始的母性」や「社会的母性」など、論点を母性に絞り、妊婦を描いた絵画表現のテー

マそのものを掘り下げていく。

そして最後の第四章で、「母性と美術」という視点から、母性をテーマにした美術にはどのようなものがあり、そこにどんな意味がこめられてきたかを明らかにする。

本論文は、美術解剖学、日本画の実技経験、そして女性という筆者自身のもつリアリティが、モチベーションから論考にいたるまでよく生かされている。その主張は明快で、説得力がある。

よって、本論文を合格とする。